

武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する

解題

荒牧典俊先生は、最古層の經典の成立順をスッタニパータ 4 章 (Sn4) (第①層) → Sn5 章 (第②層) → サムユッタ・ニカーヤ (SN) 神々章 (第③層) → SN 悪魔章 (第④層) と示され、また、最古の經典群スッタニパータ 4 章 (Sn4) の中でも、第 15 経 (Sn4 ⑮) が最古であり、特に冒頭 5 偈は一人称単数で書かれ、釈尊の肉声ではないかと指摘されている。その冒頭 5 偈が釈尊の原体験の叫びであり、ここから次々と經典が成立することを示し、人の痛みを感じつつづつかり合うことこそが仏教の原点であることを示したい。

(一)、武器を手にする経 (Sn4 ⑮) の冒頭 5 偈の構造を解明する。

釈尊の原体験が、自身の闘争苦から人間の苦を背負う共受苦への認識深化であり、見えない矢を抜いて即座に闘争苦から解放されることであることを示す。

(二)、その釈尊の根本の教えが、⑮経後半で二通りに展開されるのを示す。これが後世に、一つは妄想分別へと発展し、一つは無所有から非我へと展開していく。

仏果が一切所平等平安 (場所と時と相手を選ばない・即身成仏) であることを示す。

(三)、死後を憂う経 (Sn4 ②経) の主旨を示す。見えない矢の一解釈であったのが、生きることを否定する厭世観の始点となることを示す。

(四)、冒頭 5 偈と⑮経後半と Sn4 の第②経を比較し、順次成立したことを示す。

(五)、Sn5 章の内容を示す。②経が起点となって Sn5 へと展開することを示す。

(六)、以上から、成立時期のみならず内容においても、冒頭 5 偈 → ⑮経後半 → ②経 → Sn5 章の変遷があることを示す。⑮経後半までと②経の内容が異なるならば、②経は釈尊ではなく、弟子の誰かが書いた可能性が起こる。その②経を転換点として Sn5 章のテーマである「生と老死」の克服へと

(1) 岩波講座・東洋思想・インド仏教 1 「ゴータマ・ブッダの根本思想」

(2) ⑮経の中でも冒頭の 5 偈は特に古く、荒牧先生も指摘されるように一人称単数で書かれ仏陀の肉声を思わせる。「Attadāṇḍasutta (Sn935 – 954) は「釋尊の言葉」でありうるか」荒牧典俊。

連なり、ついには輪廻からの解脱という厭世観に行き着く。

(七)、冒頭5偈（ぶつかり合い奪い合う苦の解消とその共受苦の解決）の重要性について。

(一)、冒頭5偈の構造

1. 釈尊の原体験の苦は「人の痛みを感じつつぶつかり合う苦」である。

「935 偈 // 武器を手にするにより恐怖が生じた。人々は互いに反目し争っている。私が恐れたその衝撃を述べよう。

釈尊は武器を手にする（敵を殺そうとする）が、相手を殺すことを恐れる。その理由として次の理由が考えられる。

1. 殺されるのが怖かった。

2. 相手の痛みを感じて、殺せなかった。

3. 私も敵も人々も、生きていくために殺し合っているのを見て怖くなった。

4. 皆が、自分のように相手の痛みを感じつつも闘争するのを見て恐れた。これらのいずれも正しいと思われる。そしてこのなかでも2.の相手への共感・共苦が主たる原因と考える。その理由は、

1. 第③層 SN にはこうある。

「SN3-1-8 どの方角に心でさがして求めてみても、自分よりさらに愛しいものをどこにも見出さなかった。そのように他の人々にとってもそれぞれの自己が愛しいのである。それ故に自己を愛する人は他人を害してはならない」。

2. また、釈尊は後述するように多くの困難な人々を迎え入れてサンガを形成した。殺されるのが怖かっただけではこれらは説明できない。相手の痛みを感じて殺せなかったのである。釈尊の慈悲は、戦闘以前に共感として用意されていた。⁽³⁾

3. また、⑩経後半後半ではあるが、この修行の美德として平等（対等、皆一緒であること /sama/952 偈）であることをあげている。

釈尊の恐れは、敵の痛みを感じることであった。つまり慈悲が先にあった。

それはバガバット・ギーターでアルジュナが敵陣の肉親を見て殺せなく

(3) 脳科学によってミラーニューロンの存在から、共感が本来人間性の重要な部位を占めることが示されている。

なるのと類似している⁽⁴⁾。

2. 釈尊の苦の総体は「生存闘争の共受苦」である。釈尊は有情の一切苦を引き受けた。

「936 偈 // 水の少ないところで互いにぶつかり合い生存闘争する魚のように人々がふるえているのを見て、私に恐怖が生じた」。

次に釈尊は、人々を見渡して、ぶつかり合って苦しむのが自分だけではなく、他の人々も同様にぶつかり合い苦しむのを見る。その様子は、水の干上がる中で魚が我知らずぶつかり合う様に譬えられる（ぶつかり合う魚の譬え、②経に引き継がれる）。

ここで釈尊は、自分の苦しみだけでなく、人々の苦しみを引き受けた。共受苦と名付けたい。生きるものの各々が受苦と共受苦を持っているのを引き受けたのである。

3. 共受苦の解決場所は「ここ」である⁽⁵⁾。

「937 偈 // 世界はどこも安定していない。あらゆる方向へと動揺している。私は自分の安住の生存を求めたが恐怖に取りつかれていない所はなかった」。

釈尊は「あらゆるところが（恐怖に）ふるえている」として、その救いはどこかに行くこと（たとえば死後に行く、死後に身体を捨てて）によっては解決できないことを示す。すなわち、今ここで解決するしかないということを示す。

4 原因は見えない矢である。

「938 偈 // どのようにしても終極においては反目し争うことになるのを見て私は嫌悪した。その時である。私は人々の心臓を射貫く見えない矢を見た。939 偈 // その矢に射貫かれて人々はあらゆる方向へと突き飛ばされる。もしもその矢を抜き去ったならば人々は駆けめぐることもないし、苦しみに沈むこともない」。

苦しみの原因である「見えない矢」を発見する。その矢に突き動かされて人々はぶつかり合い苦しむ⁽⁶⁾。矢は比喩的表現であり、私たちをぶつか

(4) ベトナム戦争やイラク戦争の帰還兵は同様のことを証言している。アレン・ネルソンさんの話（拙著「仏教入門2」）。「冬の兵士」など。

(5) 講談社「ブッダの詩」p411。⑩経の題名は死ぬ前にであり、それはこの世で仏果を得るという意味である。

(6) ⑮経の後半で「見えない矢」の解釈として「名色の私物化」が説かれる。その私物化＝わがものとするとは、見えない矢によって誘導されて獲物（カーマ）へとまっしぐらに疾

り合わせる全てのものを連想させる。後に示される貪欲や怒りや無知や慢心や疑心という心的な衝動とも考えられるし、私たちが的へと向かわせる誘因である環境や目的物（欲望の対象・カーマ）とも考えられる。

○釈尊は「ぶつかり合い奪い合う生存闘争において相手の痛みを知るという個人的受苦」を発端として「人々は私と同様にぶつかり合い奪い合い苦しむことを見つめて共感して、自分の苦として問題視する共受苦」に至り「他所や他界への逃走では解決できない」ことを知り、原因である「見えない矢の構造」を見抜き、その矢を抜くことで即座にぶつかり合いがなくなり苦しみがなくなると説くのである。

(二)、⑮経後半の構造と特徴

⑮経後半では、冒頭5偈で発見された「見えない矢」の解明がなされる。冒頭5偈が一人称単数で書かれたのに対して、⑮経後半は客観的記述となっていることから、釈尊が原体験を元にして、後に書いたか、別の人が書いた可能性もある。

(1)、渴望によってカーマ（欲望の対象）が構想される

1.カーマの構想（pakappana/prakalpa/ 目の前に立てる / 後の虚妄分別・遍計所執）

渴望（jappa）が急流となって流れるとき、私たちは種々の漂流物を渴望によって構想（pakappa）してカーマの泥沼世界をつくり、その中で苦しむ（945偈）。

大洪水の比喻によって説かれる。私たちが作り出す欲望の対象に満ちた世界（カーマの泥沼 kāma-panko）を解明する。冒頭5偈で示された見えない矢は、渴望であると特定され、人は渴望に射られて、カーマを妄想し、カーマへと疾駆する。

後述のように、このカーマの泥沼は②経のカーマの洞窟に引き継がれる。

2.カーマの除去（後に無所有・無一物）

過去につくったカーマを捨て・未来のカーマを構想せず・現在にカーマを握らないなら、平安（upasanto）となる（949偈）。

駆して手にすること、つまり、奪い合うことを意味している。つまり、冒頭5偈のぶつかり合い（vyāruddha）とはぶつかり合い奪い合うことを意味している。サムユッタニカーヤ第11篇2章⑩経（SN11-2-10）に、「ぶつかり合う人々の中にいてぶつかり合わず、武器を取る人々の中であって心が平安であり、奪い合う人々の中であって奪わない。その人々を私は尊敬する aviruddhā viruddhesu, attadaṇḍesu nibbutā. sādānesu anādānā/」

後の、無一物 (a-kim-cana)・心に何も持たないということに発展していく。ここではカーマを持たないということであり、何もないということとは断定できない。Sn4 章⑩経が説く「自由な思考や態度」の説明が当てはまると思われる。カーマの呪縛を解消して、蓮の葉に水滴がくっつかないように、対象から自由なのである。しかし、Sn5 章⑦経では、何も見ずして何もないという訓練をすることとなる。これは自分の心の中の心的存在を不在にしていく修行であり、SN4-2-6 の色・受・想・識を否定する非我思想へと連なっていく⁽⁸⁾。

(2)、私物化の停止

「これは私のもの」「これは誰のもの」と、名称と形態 (nāma-rūpā) において私物化することがなければ、何かがないからといって嘆かない (950/951 偈)。

この私物化とは、家族や財を現実に所有することとも考えられるし、また、カーマを心に描くことや、家族や財を自分の物だと思ふ心理作用を指すとも考えられる。

(3)、仏果 (苦のない果実)

1.一切所平等平安

その人は、あらゆるところに (あらゆる人と)、平等で親和 (samo) していて平安 (khema) を観る (平安である santo) (952/953 偈)。

2.その人は、上・中・下を説かない。(954 偈)

あるいは、より良くあれとか、より悪くということを出さない。

3.その人は、取ることもなく、捨てることもない。(954 偈)

(三)、②経の内容

- (1)、カーマの洞窟に私たちは住んでいるが、それは自分が作り上げたものであるから堅固で克服しがたく、私物化するものはぶつかり合う。また平

(7) Sn811 偈

(8) 中村元氏は、仏教は原初には無我ではなく非我を説いているとする。この論考では釈尊は無我どころか非我も説いていない。我の存在論には言及していない。釈尊の問題意識は、闘争と生存の苦しみに関してであり、苦しみがどうして生まれるかであり、苦しみがどうしたら無くなるかである。その意味では、非我は離苦へのアプローチであるが、無我は輪廻への解答の一つにすぎない。

らかでないことを行い、死後どうなるかを恐れる。またこの人生は短い。
(772 偈)

(2)、様々な存在への渴望がその原因である。罪によって死後悪趣へ墜ちるのではないとか、死後も繁栄したいとか、死後無になりたいとかの渴望⁽⁹⁾ (tanhā) があるから、死後の存在を悩む⁽¹⁰⁾。(776/777 偈)

(3)、罪となることを行わず、想を知り尽くして、カーマへと向かわない。この世（の生存を続けたい）への欲求も、別の世（である無を含む生存）への欲求もないから、死後の恐怖や、短命の悩みがない。(779 偈)

四、⑮経と②経の関係

Sn4 章の他の 14 経と比べて、この二つの経は特に同じ比喩が用いられており、その内容や比喩の簡略さからみて、⑮経が成立してその後、それを前提として②経ができたと考える。そのことを以下に明らかにする。

冒頭 5 偈からの引用

(1) ぶつかり合う魚。

⑮経冒頭 5 偈 「//936// 水の少ないところで互いにぶつかり合い生存闘争する魚のように人々がふるえているのを見て、私に恐怖が生じた」

②経「//777// 私物化するものは少ない水が細る池の魚のように震える」

⑮経と②経は同じ比喩を用いながら、内容は異なる。

まず、冒頭 5 偈は、その作者の個人的体験を表現する中で、人々がぶつかり合う様子を魚が飛び跳ねてぶつかる様に比喩している。冒頭 5 偈では、水の少ないことは生存条件が少ないことを表し、資源などの生存条件をめぐって魚がぶつかり合っているように人々が財を求めてぶつかる様を示す。

(9) 種々の生存への欲求について。原文は、//avītaṭaṇhāse bhavābhavesu//776// また //ubhosu antesu vineyya chandam//778// とある。⑩経 //856//bhavāya vibhavāya vā,taṇhā yassa na vijjati// とある。⑩経の内容は⑮経に近いことから、②経の上記の表現は⑩経を引き継いだと考えられる。ならば、この意味は、「いつまでも繁栄したいという欲求と、なくなってしまいたいという欲求」であろう。有と無への渴望と訳したい。

(10) 全ての望みがなくなれば全ての憂いが消える。これはイソップの酸っぱい葡萄に示される負け惜しみの思想である。②経の作者が見たのはそうではなく、渴望があらゆるものを現出させるという事実である。来世も生存したという渴望が死後を憂えさせる。しかしそもそも憂えるのは渴望のせいか。この世が地獄であるからではないのか。その地獄は行き過ぎた渴望が引き起こしているのである。②経には⑮経の正当な後継者の面と、後の生存忌避の創始者の二面がある。

②経は、その条件が老化によってますます細っていく中で、人々が不安になって震えることを示している。②経は、⑮経冒頭偈の比喻を簡略化して利用していると思われる。冒頭5偈が、闘争の様子を示すためだけに比喻しているのに対して、②経は、⑮経後半で示された「私物化」を同時に問題にしていることから、冒頭5偈や⑮経後半が先に成立していて、それを念頭に②経の作者が、「財産を持つものは寿命が少なくなるにつれて死後の恐怖を増す」ということを主旨とするために用いたと考えられる。所有が短い人生の死によって失われる嘆きは既にSn4の第⑥経に表現されているが、⑥経の主旨は無執着の自由であり、⑮経の補足であり、②経とは主旨が異なる。

⑮経→⑥経→②経の順で成立したと考えられる。

⑮経：ぶつかり合いの根底に私物化がある。

⑥経：人は短命である。私物化した物は不安定（niccā 後世に a を付けて無常の語となる。ここでは無常の意味ではなく、得がたくまた失われるという意味）である。死などで失われる。所有しないことによって、染まるということがないし、染まらないということがない⁽¹³⁾（813偈）。

②経：私物化した人は、死後も繁栄したいとか、罰を受けたくないとか、死後のそれがどうなるかを恐れる。あるいはウパニシャッドやジャイナ経のように、所有物によって輪廻することを恐れる。

(2)見えない矢の譬え。

冒頭5偈は「矢を抜いて、ぶつかり合わず苦しみがなくなる」。

②経は、「矢を抜く者は、この世も別の世も望まない」。

⑮経冒頭5偈が、矢の発見と抜矢を詳説したのに対して②経は抜矢とのみ記すことから、⑮経冒頭5偈を読んだ人がそれを引用している。冒頭5偈と②経の内容は異なり、その内容からして同一人物の言辞とは思われない。

②経は矢を生存への渴望（bhava-tanhā）と解釈している。以下にも明らかとなるように、冒頭5偈では矢は [everything which make me struggle] であり、

(11) 805// 人々は我が物とするものによって悲しむ。何故ならつかみ取った物は続かないからである。この世のものは滅するものと見て、家に留まってはならない。

(12) ⑮経が、ぶつかり合いの苦しみを説くのにに対して、⑥経は短命を言う。おそらくサンガ参加者が増加して、この世の苦惱全般を抜いだした結果と思われる。

(13) 染まるの意味：⑮経に沿って解釈すると、ぶつかり合いとその苦悩に染まる意味となる。②経の後世の解釈に沿えば、この世へと結びつける条件に染まるという意味。この世の生存条件に染まって輪廻する。

(14) プリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド (BrhUp) 4.4.6// 欲望ある者は kāmayaṃāno、彼のカルマによって付着した性向と思いの場所へそのカルマをともなって行く。

②経は「desire to live in this loka or another loka」である。

多少誇張して言うならば、冒頭5偈は、私たちをぶつかり合わせるものを抜くのであり、生存そのものを否定はしていない。だから、上記の⑮経後半の構造(3)のように、一切所平等平安が仏果となる。②経は、生存への欲求を否定するから、この世全般を厭うという厭世主義に発展する端緒となる。しかし②経が成立した時点では、「死後を憂えるのはもっと生きたいという見えない矢によって引き起こされる」と説いたのである。死後への執着が死後への憂いとなると説くのである。生存をことさらに厭えとは説いていない。後世の「一切皆苦」のように人生の全てが苦であると説くのではなく、死後を憂えるのは死後への期待があるからであると説くのである。後の人は、②経の誤解釈して厭世論を振りまくことになる。その契機は三つあった。一つは、当世の輪廻解脱の流行であり、一つは、⑮経後半の「カーマの解体(949偈)」を起源とする「一切を見ないで一切の存在を無と観る観法(1099偈)」⁽¹⁵⁾であり、一つは、この生存への渴望停止である。

⑮経後半からの引用

(1)大洪水の譬え。

「想を知り尽くして洪水を渡れ//779//」。⑮経後半(1)を前提として、「渴望が起こす構想」を「想 sañña」で言い換えていると思われる。この「想」は、Sn4の⑪経で更に展開される。

(2)カーマの洞窟(渴望が構想させる(する)魅惑物)。

⑮経後半で説かれたカーマの汚泥世界は、②経では私たちの住居として説かれる。

「多くのもの(bahu)⁽¹⁶⁾に覆われた私たちの洞窟(住居)は私たちを迷わすものだから、そのカーマを捨てることは困難である」と説く。このカーマの状態が vi-sama を起こすと説く。多くのものとは、ウパニシャッドでは、個体存在を示

(15) SN1-4-4に「罪(aghām 他者を傷つけること、痛み)は欲望 chanda から生じ苦しみは欲望から生じる。欲を制する vinaya ことによって罪が制せられ、制罪によって苦が制せられる」とある。釈尊は闘争の原因である矢を抜けと言った。そもそもは欲望の全否定ではなく、欲望を制御することであった。ところが、カーマの除去は、「心に何もなくなること」へと進展し、欲望の全否定へと変化していく。制欲のための無一物観法が、主客転倒して非我説となり、離欲へと変化するのである。(一)の3.に示したように元来の釈尊の説は制欲して即身成仏する説である。

(16) チャンドギア・ウパニシャッド(ChUp) 6.2.2には「太初には有 sad のみあり(別の所 ChUp3.19.1 では無から有が生じたと言った)、それは見た(tad aikṣata 回りを見た、思った)。多数となろう bahu syām。そして火や水や諸物を産み出した(srjata)」とある。

す。カーマ⁽¹⁷⁾（動詞）することによって、多様なものが生まれる⁽¹⁸⁾という意味ならば、「私が欲望によって自分で生み出したカーマ世界から逃れることは困難である」という意味、または、「この世そのものがカーマである」という意味（loka とは kāma である）になる。

(3) vi-sama 平らかでないこと、対等・平等・親和していないこと、皆一緒の破綻。不正。

ここでは、visama に住居して、カーマにしがみつき（奪い合う）人は、死に際に「死後どうなるのか」と悲しむと説く。774//775// の二偈で visama を否定していることから、sama という正常な状態を強く意識している。つまり visama は⑮経後半(3)に説く sama (952 偈) を強く意識していると思われる。これを引き継いでいる。物や人に対して上中下なく、取ることもなく捨てることもないという皆一緒の状態が崩れていることであろう。

(4)私物化する人々 (mamāyite/777 偈) は、ぶつかり合う。⑮経後半(2)を引き継いでいる。

⑮経と②経の関係の結論

以上より、②経は⑮経の説示を土台（前提）として、それを引用しつつ新たな展開をしていることが明白であろう。また、引用を多用していることは、②経の作者としては釈尊の⑮経（釈尊が説いたのは冒頭 5 偈のみの可能性あり）を解説する形で②経を示したのであって、常に⑮経を暗唱してのちにその付加として②経は暗唱されていたと思われる。

(二)(三)(四)より、冒頭 5 偈→⑮経後半→②経の順に成立し、その内容も変化している。また⑮経を吟詠しては②経を吟詠していたと思われる。

次に、Sn4 ②経の位置づけを明確にするために、その次に成立したとされる Sn5 を検討し比較していきたい。

(五)、Sn5 章の内容

スッタニパータ 5 章の第 2 経 (Sn5- ②) は、私利私欲により所有を分けない

(17) ChUp などでは kāma は動詞として使われる。Sn では欲望の対象・欲望によって作り上げられた対象物をいう。

(18) ChUp_6.2.2 には「太初には有 sad のみあり（別の所 ChUp3.19.1 では無から有が生じたと説く）、それは見た (tad aikṣata 回りを見た、思った)。多数となろう bahu syām。そして火や水や諸物を産み出した (sṛjata)」とある。

から苦しむ。正念と正智によって制欲する。ヴィンニャーがなくなって名称と形態がなくなる。

Sn5- ⑦は、何物も前に見ないことで何も存在しないということを抛り所として、大洪水を渡り（月輪観 Sn4- ⑪に萌芽）、サンニャーから解放されて *saññāvimokkhe*、何処へも行かず静止する *tiṭṭheyya sotattha anānuyāyī*。彼が清涼なのか、彼には意識があるのか、それは分からない。彼は名称と身体から解脱していて、姿が見えなくなり、測ることができない *nāmakāya vimutto, attham paleti na upetisaṃkham*。彼を測ることはできない *atthamgatassa na pamāṇamatthi*。

Sn5- ④⑤⑦⑪⑱は、生と老衰からの解放を説く。生と老衰自体が苦であるから、Sn5- ⑤生起と消滅（種々の存在、生死、生き続けたいということと死後の恐怖）への執着を捨てて、渴望がなくなり、苦しみなく、無願であり、生まれては老いていくことを渡る。Sn5- ⑱一切所有せず、何も得ないのが苦のないよりどころでありニツバーナであり、老死の苦がなくなる。

Sn5- ⑬は、生き物とは「ものを手に入れることに染まった生き物 *ādānasatte*」と見て、あらゆるものを手にする渴望を除け。

Sn5- ⑰形態がある故に殺害や苦しみがある。形態を捨てて再誕するな。

全体として、生誕と老衰の苦からの解放が説かれる。

Sn5- ⑬では人とは「物を獲得する生き物」として描かれ、Sn5- ⑰では「形態のあるものには殺害と苦しみがある」と説かれる。Sn5- ⑬は、①最古層 Sn4- ⑮の私物化を継承しているのに対して⑰は②第二古層 Sn4- ②の生起と消滅への渴望説や⑪のルーパの滅を説く。

(六)、苦と仏果と原因の変化

以上を整理すると以下ようになる。

⑮経冒頭5偈・⑮経後半・②経・Sn5 において、(1)苦・(2)苦の原因・(3)仏果を見る

(1)苦について

⑮経冒頭5偈： ぶつかり合い

⑮経後半は： カーマ世界・失うこと

②経： 罪による死後の憂

Sn5： 生と老死（⑰経は再生の苦を説く）

(2)苦の原因

- ⑮経冒頭5偈： 見えない矢
⑮経後半： カーマの汚泥・名色の私物化（見えない矢の解明）
②経： 生存や所有への愛着・有や無への渴望
Sn5: 色があるから苦がある。識において所有があるから色
が生まれる。

(3)仏果

- ⑮経冒頭5偈： ぶつかわず苦しまない。
⑮経後半： 一切所平等平安。上中下なく取捨なし。
②経： この世も別の世も望まない。
Sn5: 生と老衰を克服して、どこにも見られない存在となる。
この世にも別の世にも存在がないが、存在しないわけ
ではない。

(六)の結論、推論されること

冒頭5偈では、

「ぶつかり合いの苦」は、「見えない矢を抜くこと」で「ぶつからず苦しまなく」
なった。そしてその境地は⑮経後半が明確にする「一切所平等平安」であったと
思われる。

⑮経後半では、

(1)見えない矢は「渴望によるカーマ世界の構想」とされ、それを除くことつ
まり「カーマを作らないこと」によって達成され、その境地は平安 (santa) で
ある。

(2)見えない矢は、「名色の私物化」であるとされ、「私物化の停止」によって
達成され、その境地は「上中下なく、取ることもなく捨てることもない」である。
この不取不捨はぶつかり合いという闘争に含まれる奪い合いという苦の存在を思
わせる。奪い合いの苦の解消としての私物化停止が想定される。

Sn4- ③⑩経に取捨なしが説かれ、⑥⁽¹⁹⁾経には不染不無染が説かれることから、
⑮経がそれらに先行して説かれたと考えられる。

(19) ③経「785// 住居に住み続けるからその人はその住居に居てダルマを捨てたり取ったり
する attā nirattā na hi tassa atthi。」787//attā nirattā na hi tassa atthi」⑥経「813//na hi so
rajjati no virajjati.」⑩経「858 彼には子や家畜や田畑や土地はない。彼には得たものも捨て
たものもない attā vāpi nirattā vā na tasmim upalabbhati」

②経では、

苦とは、「罪の果報や死後の在り方を憂う苦」である。その苦は「有無への渴望停止（この世の生存の持続や別の世への期待やあの世がなく解消されて無となることへの期待の停止）」によって達成される。

Sn5 では、

「老衰と死の苦」または「生と老死の苦」が問題となる。その原因は「闘争や苦を生み出す色（身体存在）」である。また色を生み出す「識」である。色を消滅させ、識における色を消滅することで生と老死は克服され、どこにも見られない存在となる。それは再誕しないと表現される。

なぜに、生と老死が苦なのかは示されないが、Sn5には、修行方法や修行成果を弟子が問い、それに対して長老が答える形式となっている。

Sn4章の第⑥経には、「人生は短く、所有するものは失われる、すなわち所有は不安定（無常）である」から苦であると説く。冒頭5偈の釈尊は「短命が苦である」・「この世で得たものが続かない」・「この世で得たこの身体や家族が死によって失われるから、そのことが苦である」とは説かない。私見では、⑥経や②経で「短命や死によって所有が失われること」を苦とすることは、人々をサンガに勧誘するための付加であった可能性が高いと思われる。ぶつかり合い奪い合うことが釈尊が問題とした苦であったというのが適当と思う。ところが、次第に主題は「ぶつかり合い奪い合いの苦」→「生と老死の苦」に変化していく。

つまり、

1. 釈尊の仏教

釈尊にとっての苦は「ぶつかり合いや奪い合う」人々の苦であった。

そして今示したように冒頭5偈を受けて⑤経後半は、釈尊あるいは釈尊在世の弟子が、見えない矢を「渴望によるカーマ世界や私物化の世界である」と解明し、抜矢の境地とは「自分と他者が上中下なく、取ることもなく捨てることもないという、平等で平安な境地」であると解明している。かつ、その仏果が得られる場所は、冒頭5偈で「どこをさがしてもなく（どこかへ行くことで解決されないのであり、いまここで矢を抜いて）今ここで解決される）」として即身成仏を説いたのを、⑤経後半では「あらゆるところで、あらゆる人や物にたいして(sabbadhi)」と解明しているのである。

しかし、

2. 釈尊滅後・直弟子の仏教

釈尊の滅後には、弟子にとっては「死後釈尊はどこへ行ったか」が不安となる。釈尊在世には「一切所平等平安」を実現する師が厳然と仏果を示していた。しかし、滅後にはその平安は不安定となる。釈尊が「いまここで矢を抜けばいつでもどこでもだれとでも平安なのだ」と語ったことが不安定になる。

そこで「師のように修行がままならず罪を犯した私はどうなるのか」とか「師によって成果が証明されない限り死後が不安である」とか「師はどこへ行ったか」が問題となった。

それに対して、釈尊を直に知る長老は、「死後を不安がるのも矢である」と答えたであろう。なぜなら、罪の果報を恐れるのも生存への執着であり、死後もこうありたい、ああありたい、あるいは無くなりしたい、と願望することが生死への執着なのだから、「有無への渴望を離れなさい」と説いたに違いないのである。それが⑤経の釈尊の教えだからである。ここに②経が成立した。

ところが、

3.直弟子不在の仏教

直弟子も居なくなる頃、ぶつかり合いや奪い合いにこそ原体験としての苦があるという釈尊の洞察が薄まってく。サンガは大きくなり、専門家の出家者が多数となり、時のジャイナ教やウパニシャッドの哲人や庶民が恐れる死後が問題となる。

そこで、②経の解釈が弟子の読み方で次第に異なってくる。

直弟子は「この世でぶつかり合い奪い合いの苦を解決し、一切所平等平安を得た人が、次に死に臨んで懐く死後の恐怖の除き方について、有無への渴望をやめよ」と考えて②経を成立させた。

ところが釈尊を直接に知らない弟子は②経を次のように読み違えた。

「釈尊は生存への欲望を絶って、この世でも別の世でもない、それ以外の存在になったのだ」と。それは私の知識ではヤージュニャバルキアの即身成仏説である。彼は、一切を捨てたところに純粋なアートマンが存在すると説く。カルマを解消し無一物となる時純粋なアートマン（色も識もない永遠の存在）となると説く。

②経の「有無への渴望の放棄」と「この世も別の世も願わないという無願」は、この世からの解脱と読み替えられるのである。ウパニシャッドと異なるのは、非我なるもの（色受想などの構想したもの）を排除すればそのまま形態を保有する世界が消えて、この世外の存在となるとしたことである。

4.一切皆苦の仏教

これに呼応して、この世は厭うべきものであるという一切皆苦が台頭する。

だから、

Sn5章では、そのことが種々の視点から検証されるのである。それはこの世からの解脱を求める弟子たちによって各々に修行の成果として検証されるのである。だから、識はあると言ったり、識はないと言う⁽²⁰⁾。

(七)、釈尊の仏教

真に仏陀を知るには、仏陀の時代について知らなければならないが、それについて私は未だ納得する学説を見たことがない。一般にはアーリア人と先住民との混血同化、農業の発展、商業の発展と富豪の登場と、沙門の経済的基盤発生と自由思想の展開のなかで六派哲学のような諸思想が興隆したとされる。その中で、仏陀は四門出遊して生老病死と愛別離苦などの四苦八苦を体験して、その克服をなし遂げた。このような説明がなされるがはたしてそうであろうか。服部正明先生は、こう書かれる。

「(当時隆盛の) アージーヴィカの宿命論の背景には、勝ち目のない戦争に出陣する武士階級や、早魃に収穫の望みを失った農民の嘆きがあったと考えられる。ゴースアラが活動したマガダ国には、はやくから吟遊詩人たちが戦記物語を民衆に伝え、尚武の気風があった。そしてマガダ国の強大化の過程には、たえず武力闘争が繰り返されていた。武士階級にとって、凶兆を見ながらあえて戦陣に立ち向かうカルナの悲劇(マハーバーラタ 5・141)は、そのまま明日の自分の運命であった。他方、早魃や洪水、蔓延する疫病は、農民たちにとって宿命的なものであった⁽²¹⁾。…宿命論や深い厭世観は、ジャイナ教や仏教をふくめて当時の思想家に共通して見られる傾向である。そのころ、国家間には弱肉強食の戦争がはてしもなくつづいていた。…仏陀の存命中に、その故郷であるカピラ城が、隣の大國コーサラに滅ぼされ、シャーキヤ族が皆殺しになったという惨事はよく知ら

(20) 識の有無を問う問答は、ヤージュニヤバルキアを思わせる。「BrhUp-4.5.13// 塩の固まりが内も外もなく味の固まりであるように、[我]も内も外もなく知る者としての固まり prajñānaghana である。塩から味が生じるように、我より知が生じ、それらは消えていく。だから死後に意識 samjñās はない」

(21) 平和は人間を罪から解放するが、同時に戦時の人間がいかに無辜に生きることが困難かということを知ること。人間とは記憶する生き物であると思う。というのは、戦争を知らない私は、時代を的確に捉えることができないのである。時代とは、その人が生きた実存であると同時に、モザイクの一部であることを知らしめる。総体を知るには、他人の過去を知らねばならない。服部先生はこの意味で、私よりも多くの現在を知っておられるのである。

れている。…やがてマガダ国の全インド統一へと向かっていくこの時代は、まさしく宿命論・厭世観を生む必然性をもっていた(世界の名著インド思想の潮流、また岩波東洋思想インド思想2にも同様のことが書かれている)。

Sn3-1 出家の偈に、マガダ王が釈尊に対して「精鋭の軍隊と財宝を与えるから」と勧誘したのに対して、釈尊は「釈迦族はコーサラの民であり、私はカーマを求めたよりも出離を安らぎとしたい」と断る。その後、シャカ族はコーサラに滅ぼされ、コーサラ王とマガダ王は仏弟子となる。それも長続きせず、マガダがコーサラを滅ぼし、アショーカ王は、周辺諸国を滅ぼして、その累々たる屍を見て、仏教やアーjeeヴィカという不殺生の教えを広める。

この時代背景と、釈尊がクシャトリアであったことを合わせて考えると、釈尊は季節の宮殿に侍女を従えて何不自由ない生活をしてこの世を満喫したが満足せず四門出遊して生老病死を嘆いて出家したという説よりも、⑤経第一偈のように「武器を手にして殺し合う苦しみ」を起点として「人々がぶつかり合うという人類の苦を背負い」共受苦して、その共受苦の解決を求めて出家したという説の方が説得力がある。

結語

釈尊在世には経典を書き残す必要もなかったし、滅後は詩として暗唱されて伝えられたのだから、現在私たちが手にできる経典は限られていて、その中に釈尊の生の声を再現するものがあるのかどうなのかも疑わしい。

そのような状況の中で、今回行き着いたのは、残された経典比較においては、Sn4 ⑤経が最も古く、その中でも冒頭5偈が最古であるということである。そして釈尊在世の当時の状況や釈尊の戦士階級という身分からも、武器を手にしたという告白には真実味があり、その五つの偈は、一人称単数で唱えられ、昔を今に釈尊の語りをそのまま伝えている可能性がある。

もしもそうであるならば、仏教の教理は書き換えられる。

まず、釈尊が問題にしたのは生老病死ではなく、ぶつかり合い、奪い合いである。

次に、釈尊は人々がぶつかり合う苦しみを共感して、共受苦する。

次に、その原因は見えない矢であると発見し、それを抜いて即時に平安を得る。

私たちがぶつかり合いへと走らせる因子は全て見えない矢として苦の原因となる。それは、カーマの構想や諸々のものを自分のものと思ひ込み私物化することなどへと考察されていく。それは時代とともに新しい発見をしていくものと推

察される。

そして得られる仏果は、死後得られるものではなく、時と場所を選ばず、かつ相手を選ばず一切所に得られる平等で平安な境地である。

だから、釈尊は、国王に迫られる亡命者ラッターパーラ長老 (769 偈)⁽²²⁾・捕縛殺害困窮を嫌うスパーニ(338 偈)・差別スニータ長老(620 偈)・盗賊アングリマーラ・人身売買されたアッダカーシーニ (25 偈)・遊女であったヴィマラーニ (72 偈)・子を失ったウツビリーニ (51 偈)・などの生活困窮者を彼のサンガに迎え入れて救済していくことが主たる目的であったし可能であったのである。⁽²³⁾

なぜなら、釈尊が問題とした苦は、個人的な苦ではなく、生きるものすべてが負っているぶつかり合い奪い合う苦であったから、多くの困難を抱える人々、苦しみ悲しむ人々を迎え入れることこそが第一の救済であった。これが和合僧の成立である。

釈尊の時代から二千数百年経った今日でも戦争や資源や財の争奪戦や国家間の労働力搾取やリストラ・格差に見られる生存闘争が生み出す人々の苦しみは続いていて、その原因である欲望などの見えない矢を抜くことは至難の業である。そもそも釈尊は自分の闘争苦を通して人類の闘争苦を共感して、その共受苦を背負ったが、私たちは仏教徒として、人々の苦を共感し、共受苦として背負うことができているだろうか。

まず私たちが決定⁽²⁴⁾すべきは「何が苦であるか」である。戦争か格差か短命か。次に私たちが真剣に考えるべきことは、人々と共受苦しているか否か、である。その苦の原因は見えない矢であり、カーマの構想であり、カーマの私物化であり、私たちを誘導する全てのものを探求すべきであり、まずぶつかり合いを停止すべきである。⁽²⁵⁾

(22) テーラー・テーラー偈の偈番号

(23) 平川彰先生は「原始仏教の研究」p14 に、家柄や悟りの上下によらず入団順(法臘)に席次があったことを示し、弟子に序列はなく平等であったことを示す。p17 に「僧衆の和合するは楽しく、和合せる人々の修行は楽し」と和合僧の平和を示す。特に p30 に若干の例外者は入団できないが、奴隷や前科者が入団すれば、和合することを示す。パーリ律に「出家した者には、何事もなすを得ず」と。釈尊の衆生済度の意気込みと、平等観、平和観の集大成が和合僧であった。(24) 即身成仏義に、智とは決断簡択の義なり。

(25) 私たちが心に思い浮かぶもの、それは相である。欲がなければ相はない。後の弟子は、カーマの生起そのものが苦と考えた。それは実は⑩経冒頭5偈ではなく、その後成立した⑪経を後半の継承であった。